
犬鬼人随想録 ～蒼き牡丹外伝～

皆麻 兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

犬鬼人随想録　　く蒼き牡丹外伝く

【Nコード】

N9061X

【作者名】

皆麻　兎

【あらすじ】

「里見八犬伝」の主役とも言える八人の犬士達。

彼らは、一人の少女との出会いで、それぞれの旅に多くの可能性を持ち始める事となる。その名は三木狭子。みききょうし500年以上先の未来から来たという彼女は犬士達と旅をし、最終的には犬塚信乃と結ばれる事になる。一方で、犬士達に限らず、彼女の周囲に現れる人物にも何かしら影響を与える事となる。

これは、犬士を含むいろんな者達が、彼女とかかわった事を思い出し、それを記した記録であった――――――――――

これは、2011年6月に完結した『八犬伝異聞録 蒼き牡丹』の
外伝をまとめた作品です。

プロローグ（前書き）

はじめましての方もいるかもしれません。

作者の皆麻 兎と申します。

この度は、『犬鬼人随想録 蒼き牡丹外伝』にアクセス戴き、誠にありがとうございます。

当作品は、完結した『八犬伝異聞録 蒼き牡丹』の番外編を収録した作品となっています。

『蒼き牡丹』では主人公である現代の女子高生・三木狭子の視点で描かれてましたが、当作品は、同作品に登場した里見の八犬士や、それ以外の登場人物の視点で物語が進んでいきます。

視点は章ごとに変える予定ですので、宜しくお願い致します。

また、当作品は『蒼き牡丹』を犬士達の視点で一部描いたりなど、多少のネタバレがあります。

『蒼き牡丹』をご一読されていない方は、そちらの方を先に読まれてからこちらを開くのが良いかと思われます。

プロローグ

「現在いまって…何年？」

今でも思い出せる、その娘の第一声。

某—————犬塚いぬづかし信乃戌孝は、澁我こがにおわす足利成氏公に仕官するため、故郷・大塚村から旅を始めていた。

その娘と出逢ったのは、道中で通った円塚山まるつかやまでの山中。道端に倒れていた娘を初めて目にした時、ひどく驚いたのをよく覚えている。

「浜路…?!」

異風の体ていに尼のような髪。見た事のない装束を身に着けていたのにも驚いたが、何より印象的だったのは…故郷に残してきた許嫁・浜路まじと顔がうり二つだという事実だった。

その後、その娘とは澁我へ着くまでの道中を共に旅して一旦別れる事となる。名は三木狭子みききょうしといい、姓を持つからにはどこかの武家出身の姫かと思いきや…本人が申すには、500年以上先の世から来たという。

澁我までの道中は、あまりに目新しい出来事が多くてよくは考えていなかったが…この狭子との出会いが、己の生き様を大きく変える運命的な出会いになろうとは、当時は全く考えていなかった某であった———

プロローグ（後書き）

いかがでしたか。

このプロローグでわかる通り、最初は犬士の一人・犬塚信乃の視点で物語を進めていきます。なので、第1章か彼の章といったかんじ？今後の展開として考えているのは、犬飼現八編や大江親兵衛。悪役だと墓田素藤辺りのを考えています。

それと、本当の意味で言える”番外編”として、『蒼き牡丹』のキーパソンであった少年・染谷純一の物語も書きたいな〜とか考えています。

…それを実行に移せるのかはわかりませんが…

本業も忙しいので、こちらは少しずつ更新していこうかと思っています！さて、次回から第一章に当たる『犬塚信乃編』になると思いますので、よろしくお願いします（^^）

第1話 ”先の世から来た娘”と出会って（前書き）

この第1章では、八犬士の一人・犬塚信乃の視点で話を進めます。

第1話 ”先の世から来た娘”と出会って

「まことに、あの女子は肝が座っておる…！」

某が部屋に入ると、小文吾が妹の沼蘭殿ぬいとそのような会話をしていた。

「おお：信乃！」

こちらに気が付いた彼は、屈託のない笑顔を見せる。

許我こがへたどり着いた某は成氏公に謁見をするが、あらぬ疑いにより追われる身となってしまう。芳流閣で死闘を繰り広げた男・犬飼見八いぬかいけんと共にその場から川に転落し、流れ着いた先は利根川付近にある町・行徳。そこで宿を営む犬田小文吾いぬたこぶんごと沼蘭の兄妹に助けられる。しかし、匿かくってもらってからまもない頃に、某は生死の境をさまよっていたのだが――

「何故、あの娘は某を救ってくれたのであろうか…？」

某は隣部屋の襖を見つめながら呟く。

「誰かを助けるのに理由があるのか？」…だそうだ」

「見八…？」

部屋の壁に寄りかかりながら、見八が一言呟く。

「わしが“破傷風にかかった貴様を何故、救おうとするのか”と問うたら、そのような答えが返ってきたのじゃ」

「…助ける…理由？」

「左様。おそらく…あの娘にとって、死にそんな命を救う事は、人の子として当たり前と考えてるのやもしれん」

「人助けが当たり前…」

その言葉は、普通であって普通でない。

…戦のないという時代から参ったからなのか…。それとも…？
某は狭が申していた台詞の真意を考えていた。しかし、今思えば…
彼女の純粹でまっすぐな精神こころゆえの言葉だったのだと実感ができる

のである。

そしてこの会話から数時間が経過した後、狹が目を覚まし、某や現八————この時はまだ“見八^{けんはち}”と名乗ったおった若者。そして、小文吾や妹である沼蘭殿は、大法師^{ちゅだいほうし}と名乗るご出家から、己らが持つ宿命の話を聞くこととなる。この行徳へたどり着くまでの間、法師殿は狹と共に旅をしてきたという。また、狹となぜ行動を共にしていたかも語ってくれた。

「：では、拙者はこれにて」

「法師様！お気をつけて：！」

その翌日、行徳を出る前に我らは法師殿の出立を見送った。

ただし、某と見八は許我^{こが}での一件でお尋ね者となってしまうたので、法師殿の見送りは小文吾と狹がしていた。

「狹子殿を宜しく頼みます：か」

「？どうした、信乃？」

「：いや」

古那屋の入り口付近にいた某に、現八が声をかけてくる。

我ら3人は、法師殿から託されたという事もあり、狹子と行動を共にする事となる。今まで女子^{おなこ}を連れての旅をした事がなかったので、この先はどうなるかと考えていた。

浜路^{はまじ}：。息災であろうか：

それと同時に、故郷である大塚村に残してきた許婚・浜路の事を考えていた。おそらく、狹の顔があの子と瓜二つ故に思ったのかもしれない。

「ん：？」

気がつくと、現八が深刻そうな表情をしながら、周囲を見渡している。

「現八：どうしたの？」

見送りから戻ってきた狹が現八を見て、不意に声をかける。

「：お主か」

狭の存在に気がついた彼は、我に変えたような表情で口を開く。

「何やら、誰かに見張られているような気がしたのだが……。どうやら、気のせいのようなじゃな」

フツと横目を向いた現八だったが、すぐにいつもの表情に戻った。

「相変わらず、お主は仏頂面のままじゃのう！少しは信乃を見習ったらどうだ？」

「……余計なお世話だ」

何事もなかったような顔で話す小文吾の台詞に、少し不快だったのかそっぽを向いてしまう現八。

そんな彼らに複雑そうな笑顔を見せる狭。それでも、某にとっては一時の安らぎともいえる時間であった。しかし、この時に現八が感じ取っていた気配の正体を、この後の旅で知ることとなるのであった――

「あれは……!?」

この台詞を某が口にしたとき、視界に入ってきた光景に驚いていた。己に義兄弟であり、4人目の犬士・犬川莊助義任を迎えるために大塚村付近へ我々は向かった。そこで彼が牢に繋がれた話を聞き、助け出すためにと数日をかけて情報収集を行っていた。その最中、拠点としていた場所で狭や現八が謎の輩に襲われる。

「信乃！あれは、狭子ではないか……!?」

この時、共に偵察へ行っていた小文吾が、ある方向を指す。

「……!」

群青色の髪をした忍びと刃を交える現八を目の当たりにした某は、その少し離れた所に、白髪の男と共にいる人物――狭の後姿が目に入る。

我らのいた場所は彼らから少し離れていたため、何を話しているのかは聞こえない。しかし、彼女の後姿を見る限り、狭は白髪の男に右腕を掴まれているようであった。

「狭!!!!」

すると、男は右手で狭の首筋に一撃を加えて気絶させてしまう。右腕だけが吊り上げられている状態になってしまった彼女を、己の右腕で抱えようとする白髪の男。

「…っ!!」

この事態を某と同時に、現八も気がついていたと思われる。

しかし、彼は別の敵と戦っているため、狭の所へはなかなかたどり着けない。「このままでは狭が攫われる」と直感した某は、敵の元へ走りながら、脇差・桐一文字を抜いた。

キィィン

刀と刀の交わる音が山林中に響く。

その後、何とか狭が連れ去られる事なく、その場は収まった。

「狭…!どこも怪我はないか…!!」

敵が去った後、地面に座り込む狭の側に駆け寄る某や現八。

「純一を知っている」…って…どういう…こと…?」

「狭…?」

当の彼女は、某達の声が聞こえていないらしく、よくわからぬ台詞を呟きながら呆然としていた。

…よほど、怖い想いをしたのだな…

某は無意識の内に、狭の肩に右手を添えていた。その時、彼女の身体が小刻みに震えていたのを感じたからである。

「…兎に角、移動するぞ。小文吾、有力な情報は得られたのだろうか?」

「ん…? ああ!じゃあ、この場を移動してから、俺らが得た情報を話す!」

状況を察したのか、刀を握る右腕を押さえていた現八が小文吾に声をかけ、某達と狭はその場を後にする。

「…これから、永い語りとなるでしょう。それは、私が人の子では

ない：“鬼”という生き物だからです」

「！！？」

この台詞は、荒芽山あらめやまで出会った老女・音音殿おとねが申した台詞である。莊助を助けた後、次なる犬士・犬山道節忠与いぬやまどうせつただともを迎えるため、白井へと向かった。その道中で彼の仇討ち騒動に巻き込まれ、関東管領・扇谷定正の家臣達と刃を交える事になる。その後、単節ひとよと名乗るくの一の手引きで、音音殿と出会う事となる。

彼女は狭が“先の世から来た娘”である事を知っていたらしく、神霊と成られた伏姫様の事や、己らを含む“鬼”の存在について語ってくれた。

あの時、狭を連れ去ろうとしていた白髪の男……。あれが墓田権頭ひきたごんのかみ素藤もとふじというのか……

この時、そのような事を某は考えていた。また、それと同時に、何故に彼女を連れ去ろうとしていたのか……その真意がますますわからなくなってしまった。

この後、残る犬士を探すため、3つに別れて旅を再開する事になる某達。その内訳は、下野国に現八と狭子。そして某が向かう事に。次に武蔵国へは、莊助と小文吾。新たに仲間となった道節は独り、許我こがへと情報収集のために向かった。

この時は許婚を失った悲しみでそれどころではなかったが……これまでに以上の謎とその答えが、その先の旅で待ち受けているようとは、微塵も思っていなかったのであった――――

第1話 ” 先の世から来た娘 ” と出会って（後書き）

いかがでしたか。

本編では第2章～3章の間をスピーディーにまとめたかんじです！
ちよいとまとめすぎたかなとも思いましたが、狹子が素藤らに襲われている所をずっと狹子以外での視点で描きたかったんで、ここを描けたのはよかったと思います。

同じ物語でも、視点を変えるところなにも違うんだと実感。笑

さて、物語の方ですが：

実は、話の中に出てきた信乃の脇差・桐一文字とは、実際に原作（
『南総里見八犬伝』）でも彼が使用していた刀。ただ、この時はまだ
名刀で有名な村雨丸を持っていなかったので、この脇差を使ったと
いう次第になります。

さて、次回は本編では第4章辺りの所からスタートします。ここから
だんだん深くなるであろうと思いますので、原作との違いを見せ
ながら書いていきますんで、よろしくお願いします（^^）

今作品は外伝となりますので、作品としてはさびしいかと思いますが、
宜しければご感想を戴ければ幸いです。

よろしくお願いします！

第2話 深まる謎と降りかかる危機（前書き）

ここで大角を”角太郎”と書いていたりもしますが、後者は大角の幼名みたいなもので、決してスペルミスとかではありません。
…念のため、お知らせします。

第2話 深まる謎と降りかかる危機

荒芽山での一日が終わり、我らは3つに分かれて犬士探しの旅を再開する。下野国へ向かう事となった現八・狭子・某の3人は、道中：上野国と下野国の国境にある集落・猿石村で一宿取る事と相成った。

村にたどり着く前に狭が妙な事を申ししていたが、その日の夜：泊めて戴いた村長の家にて、思いもよらぬ出来事が起こったのである。

「信乃様…」

「…!？」

風呂からあがったため、黒い髪が半濁き状態の狭。

そのいくらか艶っぽい彼女の口から、普段は口にしないような申し方で、某の名を呼ぶ。

…何か様子が変だ…。それに、狭は某の事を“様”づけで呼ばないはずだし…

「…!!」

一つの可能性が頭に浮かんだ某は、驚きの余り後ずさりをする。

「お主…まさ…か…?」

某は恐る恐る、村雨丸の柄に触れていた利き腕を外しながら、狭に近づいていく。

「信乃様…。私です…大塚村の浜路…はまじです…!」

「…!!」

まさか、誠に…!!

狭の口からこの台詞が紡ぎだされ、その瞬間：某は、彼女の肉体に何かを取り憑いている事を悟る。しかも、それが、己の亡き許嫁・浜路だという事を————すると、信乃の心臓の鼓動が少しずつ早くなっていく。

「信乃様っ…!!」

狭子の“中”にいる浜路がそう叫んだ直後、某に向かって走り寄ってきた。

浜路……！！！！

この時、一瞬、狭の顔が浜路と重なる。そして、己の胸に飛び込んできた彼女を強く抱きしめた。“身体は違えど、この感覚はまさに浜路である”—————それを己の身で体感する信乃。

「私……ずっと……信乃様にお会いしようございました……！」

某の胸の中で、浜路が涙を流す。

それを見た途端、今まで抑えていた気持ちがあふれ出してきた某は、狭の背中に腕を回して、ギュッと強く抱きしめていた。

このまま、時間^{とき}が止まってしまえばいいのに……

肉体は狭子だが、浜路を抱きしめている感覚に陥っていた某は、すっかりそのような事を考えていた。しかし、今にして思えば……この行為がどれだけ狭子を侮辱し、苦しめていた事か—————それについては、今でも後悔している。

「ぐっ……！！！！」

この出来事が収まった後—————普段は無愛想で感情を表に出さない現八が突然、某の頬を殴った。

その勢いで、地面に転げ落ちる信乃。

「何をする……！！？」

何故殴られたのかが解らず、鋭い視線で某は現八を睨みつける。

その隣の部屋では、浜路に取り憑かれたせいで疲れて倒れた狭子が眠りについていた。

「……ふん。死んだ女の事を、いつまでも引きずりおって……！」

「何……！！？」

逆上しようとした某を見た現八は、ため息交じりで再び口を開く。

「まあ、お主がどこの女を想うのは勝手やもしれぬが……」

「……？」

その直後、周囲の空気が変わったような感覚に陥る。

「お主は先ほどの出来事で、狹が取りつかれながらも、意識があった可能性を考えなかったのか!!?」

「えっ:!!?」

その台詞を聞いた途端、某は身体を硬直させる。

「それに:お主の態度がどれだけ狹につらき想いをさせているか:朴念仁たるお主には、解せぬであらうな!!!」

「:」

まるで某を殺さんと言わんばかりの形相で、現八は怒鳴りつける。

これだけ必死の彼を見たのも初めてだったが:何より、浜路の事を想い、落ち込んでいる自分と、そんな己に側にいてくれた狹の事を思うと—————己が情けなく感じるようになる。

「:確かに、現八の申す通りやもしれぬな:」

やっと、自分が殴られた理由を悟る。

“申し訳ない”という気持ちがいっぱいになった某は、すぐさま眠りにについている狹の元へと歩き出したのであった—————

このような出来事があった後、下野国へ入った某達は、たまがえし返璧の里で6人目の犬士・犬村大角いぬむらだいかくまさのり礼儀と出逢う事となる。最初、庚申山で化け猫と対峙した某達はその後、大角の父・赤岩一角殿の亡霊から化け猫が一角殿に成りすまして、大角:この時は角太郎と名乗っていた彼や彼の妻・雛衣殿ひなきぬにひどくあたりちらしている事を知る。

「どんなに:どんなに:無念であった事か:!!」

父親の骨を握りしめながら呟く大角の瞳には、大粒の涙が流れていた。

狭や雛衣殿の活躍もあって、某達は一角殿に化けた化け猫を退治する事に成功する。しかし、これによって永遠に父を失う事となった大角は、悲しみの余り、地べたに座って嘆いていた。その光景は:

幼き頃、母・手束^{たつか}を失った時の己にそっくりであった。

「うう…う…」

周りを気にせずに泣き続ける大角を見た狹は、自分の事のように涙を流し…現八も、少しつらそうな表情で見下ろしていた。

「角太郎殿には、俺たち兄弟がついている…。これが、その証じゃ…」

静かな口調で語る信乃は、大角に「礼」の文字が浮き出た水晶玉を渡す。

その直後、自身の懷から「孝」の字が出る玉を取り出して、彼に見せた。

このような悲しき別れ等がありながらも、某達の犬士探しの旅は続く――

その後、狹子が持つ能力・千里眼（＝遠くの物や、本来なら見えぬ物も見える能力）によって武蔵国へ向かった莊助達の現状を把握したり、道中で九尾の神狐・政木狐との出会いもありながら、某達は、武蔵国・穂北で一度再会を果たす事となる。

狹の持つ千里眼にも驚きだが、彼女に対する謎は深まるばかりだ。そもそも、巫女の家系でもなしにそのような能力を持つはずもないし、道節を探す時に見せた蒼き光など…彼女に対しては、解せぬ事が多い。また、各々の情報を共有する中、蒼血鬼（＝血を食らう鬼の事）・墓田権頭素藤や足利公や関東管領の裏で暗躍する妖しき尼僧・妙椿^{みょうちん}らの名も耳にする事となる。

そんな中、穂北へ向かう途中ではぐれた7人目の犬士・犬坂毛野胤^{いぬさかけのたね}智^{とも}を迎えるため、鈴茂林^{すずのもり}へ向かう事となる。向かったのは某・莊助・小文吾・現八・大角・道節と狹を含めた7人。犬士も毛野を含めて、あと2人という所までうまく事が進んでいた。

しかし、その鈴茂林^{すずのもり}にて、新たな戦いと思わぬ危機が待ち受けていた。

「はっ!!!!」

「ふんっ・・・!!」

林中は一つの戦場と化していた。

叢に隠れて、毛野と彼の父上を手にかけてという籠山逸東太縁連がこみやまいっとうたよりつら一騎打ちを繰り広げる中：某達には、墓田素藤に仕える蒼血鬼・牙が静せいと、妙椿の刺客と思われる黒ずくめの者達の襲撃に遭う。

素藤から狭子を連れてくる命を受けていた牙静という男は、すぐさま彼女を捕らえようとするが、某が間に入る事で戦いの火ぶたが切られる。この漆黒の着物をまとった敵は、刀を使わずに戦う丸腰状態だが、鬼であるせい、某の一撃も見事に防御してくる。

「妙椿と手を組んだり、狭を狙ったり・・・。お主達の真の狙いはなんなのだ!!!」

「残念ながら・・・その真意は素藤様しか存じません」

某の猛攻にも、平然とした表情で対応する牙静かお。

その後も戦いが続き、両者一步も譲れない状況となっていた時だった。

「やめてええっ・・・!!!!!!」

「!!」

突然、少し離れた場所から狭子の叫び声が聴こえる。

「ぐあっ!!」

それに反応した某は、その一瞬の隙を突かれ、腹部に強い衝撃が走る。

同時に、その勢いで近くにあった木まで蹴り飛ばられ、激突する。

「くっ!!」

地面に座り込んでしまった某を見下ろす牙静。

とどめを刺されるかと思いきや：彼の視線は別の方へと向いていた。

「ふ。。こんな時に、背中がから空きとは。。初めて相まみえた時と同じで、隙だらけの娘ですね。。」

「!!!」

そんなことを呟いていた牙静は、不気味な笑みを浮かべていた。

「ま…て…!!」

その直後、敵は狭のいる方へゆっくりと歩き出す。

立ち上がって追いかけようとしたが…先ほどの攻撃で頭をぶつけたせいか、立ちくらみを起こして、思うように身体が動かせない。腹部が痛く、今にも気絶しそうな某だった。

「信乃さん!!」

「莊助…」

その数分後、意識が少しだけ飛んでいた某は、莊助に名を呼ばれて我に返る。

身体がふらふらしながら顔をあげてみると――――

――――妙椿の刺客を退治した現八らの前に、牙静が立っていた。

しかも、奴の腕の中には…締め上げるようにして捕えられた狭の姿が。

「ああ…あっ!!!!」

彼女は某の状態に気が付き、敵の腕から逃れようと試みたようだが、逆に腹を締め付けられる事で、尚更逃れられない状況に陥ってしまった。

「狭っ…!!!!」

その苦しそうな表情を見た途端、焦りと憤りを感じた某は、思わず彼女の名を叫ぶ。

意識が朦朧とする中、敵は狭が持つという“三世の姿”の話や、此度の件が妙椿の命令でもある事などを語る。そして、某達の元を去ろうとした時――――連れて行かれる事を理解した狭は、必死にこちらに向けて腕を伸ばそうとする。

「信乃…!!!皆…!!!」

某の瞳に、泣き叫ぶ狭子の顔が映る。

「狭っ…!!!!」

彼女の元へ行こうと必死に腕を伸ばそうとするが――――敵は

狭子と共に姿を消してしまった。

「くそっ…！」

莊助の肩を借りて立ち上がった某は、絶望と自責の念に包まれていた。

「守る」と決めたのに…なんというザマだ…！！

悔しさの余り、拳を強く握りしめる。

「…おい…」

気が付くと、我ら犬士達の前に、籠山逸東太を倒した毛野が現れる。頬に返り血をつけた彼の手には、狭が持っていたお守り刀と、牡丹花の紋が刻まれた鞘が握りしめられていた。

「貴様らが隠れていたのは薄々勘付いていたが…。今は兎に角、あの女子が連れ去られた所以を説明してもらおうか…！」

そう話す彼の表情は、かなり深刻そうだった。

後で本人から聞く事となるが…どうやら彼は、狭のおかげで命を救われた。そして、親の仇討を成せたらしい。しかし、それもあって逸東太が連れていた牙静に隙を突かれて捕まってしまったため、「自分にも責任がある」と感じて必死のようであった。

しかし、敵の真意がわからぬ某達は、そんな彼の疑問に答えられず黙り込んでしまう。

「若」

「…！！曳手^{ひくて}か…」

我らが黙り込んでから、いくらか時間が経過した後————

——道節の近くに、彼や音音殿^{おとね}に仕える忍び・曳手殿^{ひくて}が姿を現す。

彼女の登場は、微妙な空気になっていた某にとっては、一種の救いであった。

「…如何した？」

「…“さるお方”からの命にて…若や皆様をお迎えに上がりました」

「“さるお方”…？」

その遠回しな言い方に、首をかしげる大角。

そんな彼に気が付いた曳手ひくでさんは、眉一つ変えずに口を開く。

「…それは、安房国を治める殿・里見義実様でございます」

「!!?」

「突然の呼び出し、応じてくれて大義である」

「はーっ」

その後、曳手ひくで殿と共に、某達一行は、行徳へ向かった。

小文吾が営む宿・古那屋にて、義実公との初対面と、大法師ちゅだいほうし様との再会を果たす。

挨拶が済んだ後、法師殿の口から里見家が窮地に立たされているという現状などの説明があったが…話はすぐに、狭子への話題へと移る。また、行徳に着くまでの間、毛野には莊助や現八の口から、何故鈴茂林にいたのか等の経緯を説明していた。

「何…? 狭殿が連れ去られただと…!?!」

「はい…」

某の口から、狭が攫われた事を聞いた法師殿は、目を丸くして驚いていた。

しかし、妙だったのは、その後ろにいた義実公も、ひどく驚いていた事である。それから、莊助や大角が事の経緯を彼らに口頭で伝えた。また、義実公が毛野に直接声をかけて、狭が所持していたお守り刀を見せたりした後————法師殿の口から、

衝撃的な事実を知らされる。

「貴方がたが今日まで旅をし、“狭殿”と呼んでいたお方こそ…鷹に攫われて行方不明となっていた、里見の五の姫・浜路はまじ姫様なのです…!!!」

「なっ!!!?!?」

法師様の台詞に、某達犬士は、驚きの余り言葉を失ってしまう。

「狭子が…里見の姫…!!?!」

某は、とても信じられないような表情で、その言葉を口にする。

しかし、その台詞とは裏腹に…今まで狭に対して腑に落ちない事が、
全部一つにまとまった――――――――――そ
んな感覚も覚えた信乃であった。

第2話 深まる謎と降りかかる危機（後書き）

いかがでしたでしょうか。

今回、『蒼き牡丹』の狭子視線では描ききれなかった部分を存分に書けた気がして、大満足しています♪
なので、内容も密度が濃かったかも：

さて、第1章である信乃編は、3話構成でいくつもりでしたが…このまようまくまとまるのだろうか？という、不安もあり（汗）でも、構想がゾクゾク浮かんでいるので、頑張ってまとめていこうかと思っています！

ご意見・ご感想等がありましたら、宜しく願います（^^

第3話 守るための戦い

「狭子が里見家の姫である」という驚愕の真実を、われら犬士達は法師殿の口から知らされる。初めは言葉を失っていたが、これまで腑に落ちなかった出来事が一つに繋がり、ある意味納得のいく話であった。

蒼き光を放つのも：おそらく、我ら犬士を生み出した伏姫様と同じ血を受け継ぐがゆえなのであろうな：

この時、そんな事を考えていたが：今はとにかく、この苦境を乗り越えなければならぬ。

「：ここにおりましたか、信乃殿」

「大角：」

とある晩、行徳付近（いりよくつけ）を流れる利根川の付近で考え事をしていると、古那屋のある方角から大角が現れる。

連れ去られた狭を救うべく、まずは道節に仕えるくの一・（ひとよ）単節を偵察に向かわせた。居所を探るのが一番の目的であり、一方で蒼血鬼・（ひきたごんのかみとぶじ）墓田権頭素藤らの妨害がないかを確かめる意もあった。

単節殿からの朗報を待つ一方：某と莊助は、道節の口から狭子と彼女が所持していたお守り刀の話を聞いていた。これは、その日の夜の出来事である。

「：眠れませぬか？」

「ああ：。大角もか：？」

「ええ：まあ：」

某と大角は、空を見上げながら、そのような事を口にしていた。そして一呼吸程置いた後、大角がこちらを向いて口を開く。

「信乃殿、一つ：確かめたい事がございます」

「確かめたい：こと：？」

彼の思わぬ台詞に、某は首をかしげる。

「貴方と…そして、狭…浜路姫様の事です」

「！」

狭子の名が出た途端、某の表情が少し強張る。

そんな己を横目で見つめながら、大角の話は続く。

「…貴方は、彼女の事をどのように思いか？」

「…？」

何を訊くのかと思えば…予想だにしない問いであった。

「…」

某はほんの僅かな間だけ、黙り込んで考える。

「共に旅してきた同志…仲間といった所か」

「…本当にそれだけですか？」

「え…！？」

この時、大角の顔からいつもの穏やかな笑みが消えていた事に気が付く。

そして、彼から食い入るような眼で見つめられながら、時は過ぎていく。

「あの娘は、亡き許嫁と顔立ちがそっくりだが…とても芯の強き女子で…」

独り言のように呟く某の頭の中には、明るい笑顔を見せる狭。泣き叫んでいる所等————喜怒哀楽を示す彼女の姿が浮かんでいた。

『ありがとう…』

そして、最後に浮かんだのは…一筋の涙を流しながら笑顔を見せる、暖かい微笑みであった。

心の臓が強く脈打っておる…。しかも、その脈も速くなりつつある…。これは…

「狭…」

彼女の名を口にした時、某は何かを悟ったかのように空を見上げた。

「…わたしが何を申したかったのか…。諭していただけたかと思えます」

空を見上げる某を横目に、大角は穏やかな表情で語る。

彼に問われ、はっきりと悟った己の気持ち。同志や仲間としてだけではない、莊助のように義兄弟としての感情にもあらず……。前向きであり、明朗快活……。そして、純粋な精神こころを持つ彼女を、恋い慕っていた事を――

「……大角」

「……何でしょう？」

己の元から去ろうとしていた大角を、呼び止める信乃。

大角の方に向きなおした某は、まるで宣言するかのように口を開く。

「某は、狭の事を好いておる。……故に、何があるうともあの娘を魔の手から救い出したい……!! これは、彼女が里見の姫ゆえとか……そのような事は関係なしに……じゃ……!!」

そう言い放つ某の瞳には、強い焰のような眼差しを宿していた。

そんな己を見つめて黙り込む大角。すると、普段の穏やかな笑みに戻り、閉じていた口を開く。

「それを聞いて安心致しました……」

「大角……？」

「おそらく、この先……我々には更なる危機が訪れるやも知れぬ。しかし、貴方のように、恋い慕う者……「守りたい」と思う者がいれば、人は何倍も強くなれる……という事です」

そう告げた後、彼は古那屋の方へと戻っていった。

大角……まことに、かたじけない……!!

某は、大角のおかげで狭への気持ちを自覚する事ができた。これまで、許嫁だった大塚村の浜路の事が、やはり忘れる事ができなかった。しかし、狭が敵に攫われ、その身が危ない事。そして、先ほどの会話によって、某の心は決まったのであった――

「犬士達はおるか……!!？」

われわれ

その翌々日、古那屋にいる犬士達の元に、政木狐まぎぬが現れる。

「政木狐……。そんなに声やかましくせんでも、聞こえておるわ」
あまりの大声に、ため息交じりで呟く現八。

しかし、そんな彼の台詞を完全に無視していた狐は、某の存在に気が付くと、すぐさま近寄ってくる。

「んな事より、朗報や!! 浜路姫の居所がわかったんや!!」

「本当か!？」

それを聞いた途端、その場にいる全員の表情が変わった。

「しかし、政木狐よ。そなた……大江親兵衛とやらと共に、京へ向かっていたのでは……？」

狭の居所がわかったのは喜ばしいが、某はこの狐が何故この場にいるのが不思議でたまらなかった。

「ああ……。実はな……」

ドカカッドカカッ

その後、行徳を出た犬士達は、とある場所へ向けて馬を走らせる。

行徳を出立する前——————政木狐が行徳にたどり着くまでの経緯を語ってくれた。

彼の話だと、京から安房国へ戻る途中、妙椿ら敵方の動向を探っていた単節殿と偶然会いまみえる。そこから親兵衛の案により、政木狐を行徳におる我々の所に向かわせ、親兵衛と単節殿に敵の元へ乗り込む事となったという内容である。

政木狐^{かれ}の話だと、単節殿は手負いだったという……。鬼の血を引くならば、傷の治りも早いと思っていたが……

某達は、道節から「鬼の忍びは我々よりも強靱な肉体を持つ」と聞いてはいたが、何故か妙な胸騒ぎを感じていた。

しかし、その妙な胸騒ぎは、嫌な意味で的中してしまう。

「単節さん……」

眠るように息を引き取った単節殿を見下ろしながら、涙を流す狭子。行く途中で通りかかった海岸で、妙椿の刺客に襲われている彼女達

を見つけた某達。莊助達にはすぐに彼らの加勢に向かってもらい、某はその場にいなかった狭を必死で探した。

「狭っ！！！！」

ついに見つけ出した時、狭は墓田素藤と共にいた。

「信乃っ……！！」

そう己の名を呼ぶ彼女は、素藤に抱きすくめられ、その腕から容易に逃れられない状況に陥っていたと思われる。

特に怪我をしていないようなのでそこは安心したが————己の頬に狭の頬を近づけ、見せつけるかのように抱きしめる敵の表情を見た途端、無意識の内に怒りを感じていた。

その後、狭子を奪い返すために、某は素藤との死闘を繰り広げる。完全な勝利はできなかったが、何とか狭を取り返す事に成功した。

この時は、再会できた喜びでそれ所ではなかったが————

——今にして思うと、狭が身を挺して素藤を止めようとした際、彼女にとって素藤は単なる“敵”ではなくなっていたのかもしれない。妙椿の刺客を退けた後、鬼の弱点たる蒼血鬼の血が塗られた武器で致命傷を負った単節殿は、双子の姉・曳手殿ひきての腕の中で息を引き取る。“忍びは人にあらず”

“死ぬ時は独り”という掟のある彼女達に涙を流していた狭をとても愛おしく感じた某は、黙ったまま彼女を抱きしめる。

身近な者であろうがなろうが……尊い命が失われる事は、誠に悲しい……。そして、多くの命が犠牲となる“戦”……。守るべき者のためとはいえ、早くこのような悲しい出来事がなくなるよう努めなくては……

某は声を押し殺して泣く狭を抱きしめながら、これから待ち受けているであろう大戦おおいくさへの心を強く固めるのであった。

「それでは、各々……明日より、各地へ展開してもらいたい！」

「御意……！」

狭を助け出した後、我ら犬士の一行は安房国・里美家の本陣がある滝田城を訪れた。

兼ねてより里美家の棟梁・里美義実公さとみよしざねから家臣として認められた某達は、戦での防衛使を勤める事と相成った。その戦の相手は、澁我あしかがのしげうじの足利成氏公や関東管領・扇谷定正を要とする連合軍。

道節からの報せによると、この戦を起こすために画策していたのが：妙椿と名乗る尼僧と、白髪の鬼・墓田素藤だという。しかも妙椿とは、里美家に滅ぼされた領主・山下定兼の妻であった玉梓なる者が怨霊として現世うつつよに現れた存在だという。

因果が巡る：とは、まさにこの事を申すのであろうな：

某は、己が防衛使を勤める事となった国府台こうのだいへ向かいながら、そのような事を考えていた。

そして、戦いの火蓋が切られ、この地に赴いた某・現八・親兵衛らは戦いに身を投じていく。狭の奪還を通じて、8人目の犬士である事が発覚した犬江親兵衛仁いぬえしんべえまさし。年は13か14程と年若いが：京で見せたという活躍や、最初に彼女の奪還を成功させた童なだけあり、同じ犬士としてとても頼もしかった。

「けが人を癒すため」として行軍に加わってくれた狭のためにも：必ず、この地を死守してみせる：！！

馬にまたがった某は村雨丸を駆使して、襲い掛かる敵を次々となぎ倒す。戦場は、村雨丸からほとぼしる水柱が、この戦場を舞う。現八や犬兵衛も足軽隊として彼らの前を先導し、確実な一撃と素早い動きで敵を翻弄していく。

「あれは：！！？」

しかし、優勢かと思われていた最初の戦も、敵方の新兵器によって苦戦を強いられる事となる。

後に狭からその兵器の名を教えてもらう事となる。彼女の話だと、その新兵器は駢馬三連車へいはさんれんしやといい、大陸にある国の戦車を真似て作った戦車だという。大八車みたいなものを3つ連ね、前と後ろにそれ

ぞれ鉄砲と弓矢を持った6人の兵がそこに乗り、御者は左右に2人と騎馬が6頭。馬にもそれぞれ、薄鉄の鎧が着けてあるという代物。戦のさ中、我ら里美軍は「それ」を目の当たりにするのである。

「犬塚殿！！わが兵は馬兵と足軽隊で組まれております！！このままでは、圧倒的に不利です……！！」

兵の一人が某に進言する。

「っ……！！」

周囲を見渡すと、駢馬三連車を前にもろくも崩れる自軍の光景が目に入ってくる。

確かにこのままの進軍は、絶対的に不利……。しかし、敵に背中を見せれば、追い討ちに遭って全滅する可能性も……

兵達にどのような命を下せばよいかと困惑する信乃。しかし、時は一刻と過ぎ、本当に撤退をせねばいけない状況に段々陥っていく。

「信乃……！！」

「現八……！？」

すると、全身が傷だらけの現八が某の元に現れる。

「わしが殿しんがりを勤める……！！その間に……早く兵を退かせるんだ……！！」

その台詞を聞いた途端、目を丸くして驚く。

しかし、戦況が不利なため、某の心も揺らいでいた。

「早くしろ……！！このまま全滅させる気か……！！？」

鬼気迫った現八の表情かおを見た途端、考える暇などない事を悟る。

「まもなく夜が更ける……！！一時、撤退せよ……！！」

某の合図と共に、里美軍は撤退を開始する。

現八……死ぬなよ……！！！！

殿を務めてくれた現八が無事に戻る事を願いながら、某や親兵衛の軍は撤退を始める。国府台での戦い初日は、里見軍に多大な被害を与えて終える事となった。

その後、文明^{ふめい}の岡に陣を移す事となる里見軍。絶体絶命の危機に陥っていたが：狭の元に里見家一の姫であり、我ら八犬士の産みの親である伏姫の神霊が現れる。彼女が狭をこの時代に誘った張本人である事を悟り、実の姉姫にあたるといふ事実は、不思議な心地がした。

また、伏姫様は、劣勢のわれ等に「火猪^{かちよ}の計」といふ策を授けてくれた事により、戦況が一変。里見軍による逆転劇が始まるのである。そして、勝利への光明が見えてきた矢先————狭子の元に魔の手が伸びていたのである。

第3話 守るための戦い（後書き）

いかがでしたか。

今回は恋愛模様もあれば、戦場面もありで、まとめるのが大変でした。

：そして、やはり3話分ではまとまりきれませんでした（TOT）
信乃は本編でだと準主人公的な立ち位置にいたので、彼視線で描くと、いろいろ載せられる事が多い・・・。

とまあ、こんなかんじですが、とりあえず随想録1の信乃編はもう少し続きます。

ご意見・ご感想があれば宜しくお願いいたします！

最終話 狭子の幸せを願って（前書き）

”最終話”とありますが、この章が最後なだけであり、随想録が終わりというわけでもありません。

最終話 狭子の幸せを願って

「はあああつ!!」

馬にまたがりながら、某は村雨丸を振るう。

神霊・伏姫様が授けてくださった神猪の活躍によって、形勢を一変させる里見軍。某も先陣を切って敵をなぎ倒していく――

――優勢に変わってきた矢先、某の元に一人の足輕に装った里見の忍びが現れる。

「犬塚殿、一大事でございます」

「：如何した」

「実は：」

忍びによる報せを聞いた某は、急ぎ滝田城へと馬を飛ばす。

国府台を出立する少し前――

「狭：否、浜路姫が!!?」

里見軍の陣に戻った某は、狭子と共に滝田城へ向かっていたという
まさかだ! いぜんたかつぐ
政木大全孝嗣からの報せを聞いて驚く。

「はい。よしざね義実公の訃報を聞き、某と城へ早馬を走らせておりましたが、不覚にも某は気絶させられてしまい：気が付けば、姫のお姿があられなかった次第でございます!!」

「貴様：そのお方は、殿より御身を預かりし姫!! 護衛もできず、何という不始末!!」

「申し訳ございませんっ!!!!」

某の側にいた里見家の家臣が、大全を責める。

しかし、彼の口調を聞いていれば、本当に責任を感じているのがよくわかる。

「：過ぎた事は、致し方ない。：だが：」

右手の拳を強く握りしめながら、某は重たくなった口を開く。

「姫の救助には、某が向かう!! 大全、お主はそれを現八や親兵衛

に伝え…けが人への尽力を頼む！」

「御意！！」

落ち着いた口調で彼らを宥める一方、某の胸中は慌てていた。

大全は連合軍方の忍によって、狹が連れ去られたと申ししていたが…。だが、成氏公や管領殿は彼女の顔は知らぬはず…。故に、これは…！！

馬を走らせながら、某の頭の中には妙椿なる者の名が浮かんでいた。

…里見家を恨み、処刑された玉梓たまずさが怨霊…。忍を差し向けたのがそやつならば、彼女の連れて行かれた場所は…！！

連れ去られた狹や敵の事を考えながら、某を乗せた馬は山道を駆け抜けていく。

「狹…。よく…よくぞ頑張ったな…！」

これは、滝田城に向かった某が狹を助け出した時に述べた台詞しやいば。

あれから滝田城へ参った某は、狹から放たれた蒼き光と村雨丸の力によって、敵である玉梓の怨霊を滅する事ができた。しかし、莊助から受け取った狹の身体には無数の切傷があった。玉梓によって怪我を負わされた彼女は、多く血を失ったためか意識を失っていたようだ。

女子が鎧を身にまとう事さえまれなのに…狹はこの小さき身体で痛みに耐え、ましてや敵である玉梓をも説得しようとして…

この華奢で小さき身体に、如何なる程の強さを持っているのか——
——
狹の身体を抱きかかえながら、某の胸中はそんな想いでいっぱいになる。

その後、薬師の元に送り届けた後、祈るような想いで眠る彼女を見つめ続けた。

やはり、狹が助からないのではないか…と思うと、誠に胸が痛くなるものだな…

義実公の家臣として戦の講和条約が結ばれる場におった時も、某は狹の事で頭がいっぱいであった。

先の戦いで足利成氏公や扇谷定正らと戦い勝利した里見軍は、領地や賠償金は求めずに条約を締結させる。それは、「安房国を争いのない平和な国にしたい」という義実公たつての願いであった。

こうして、狹が後に申ししていた大戦・“関東大戦”が終わり、安房国には平和が訪れる事と相成る。しかし、某には未だ燻ぶっている想いと、未だ明かされていない狹子の前世なるものという問題が待ち構えていたのであった――――

狹…。某は…!!

とある晩、某はいろんな事を考えていたため、なかなか寝付けなかった。というのも、今から少し前、狹子が墓田素藤ひきたもとふじによって攫われたからである。

怪我が治った後、狹は姉君にあたる静峯姫しずおが入手した特殊なお香によって、前世の記憶が蘇る。「内なる何かを思い出す」という逸話が誠であるとは誰も考えておらなんだゆえ、その場にいた里見の姫君達や、報せを聞いた八犬士われわれも驚いた。そして、気を失って眠っていた彼女を、素藤が富山へと連れ去ってしまったのである。

ん…?

眠るに眠れなかった某は、突然何やら変わった気配を感じ始める。

「…誰かおるのか？」

周囲を見渡しながら、その言葉を口にする。

しかし、人という気配は全く感じられない。部屋の外から聴こえる風の音しか周囲にはなかった。

気のせいかな…

そう思った某は、再び床に就こうとしたその時であった。

『信乃…』

「…!!?」

聞き慣れぬ声が聞こえた途端、某は目を見開いて驚く。

そんな己の名を呼んでいたのは――――――――――柿のような色

の髪をし、所々ちぎれた着物を身に着けた男子おのこがいた。しかし、その姿は神霊のごとく透けて見える。

「そなた…何者だ？」

疑惑の瞳めでこの者を見上げる。

『俺の事はいい…。それより、あいつ…狹子を…』

「狹を知っておるのか!!?」

考える間もなく、この霊らしき者が狹を知っている事によって、ますます頭が混乱してくる。

…だが、この顔…。もしま…?

「そなた…染谷純一…なる若者か…?」

恐る恐るその名を口にする。

あまり詳しくはないが、狹から聞いた事がある。彼女は幼き頃から本当の親の顔を知らず、孤児院なる場所で育ったと…。そして、その孤児院とやらから共に飯を食い、親しくしていた男子おのこがおった事を。そして、犬士探しの旅の道中にて、素藤が申していた“染谷純一”なる者であった事を知る事となる———

「じゃが…何故、某の名を？」

『…』

そう問うた瞬間、染谷とやらの霊は複雑な表情かおをしながら遠くを見つめる。

『それよりも…だ。お前、狹の前世が、あの蒼血鬼の想い人だったって事は知っているか?』

「しって…?」

聞き慣れぬ言葉に、某は首をかしげる。

しかし、“あの蒼血鬼”が墓田素藤ひきたもとふじである事だけは理解できた。

『俺は、あの鬼…今は墓田素藤ひきたもとふじという俺の名を継いだ奴の事を知っている。…奴がどれだけ、琥伯こはくって女子を想っていたのかも…』

「!!」

狹が申ししていた、前の世を生きていた女子の名…!

“琥伯”という名を聞いた途端、某の表情が強張る。

『あいつに世話になった俺としては、幸せになってもらいたいと願っている。…だが…!』

「…だが…?」

某は、彼が申す事を静かに聞いている。

…妙椿の事もあり、素藤^{やっ}を敵としてか見ていなかったが…このように、気に掛ける輩もいようとはな…

彼の話を聞きながら、某はそんな事を考えていた。

「最終的には、狭子にも幸せになってほしい…と願っている。しかし、あいつは今、“琥^こ伯”としての己も思い出した…。きっと、今の自分の事もあって悩んでいる…!」

「純…お主…」

彼の口調は、冷静そうに見えてとても必死そうな眼差しを持っていた。

おそらく、狭の事を好いていたのだろう————だが、霊として現れたという事は、もうこの世の者ではないという証。恋い慕っていても、触れることすら叶わない身となっている事実がひしひしと感じられる。

『だから、犬塚信乃! あんたも狭の事が好きならば、あいつが何を望んでいるのか…どう在りたいのかを確かめてほしい! 狭にとってお前と蒼血鬼^{あいっ}のどちらと共にあるのが幸せかを…!!』

「狭の…幸せ…」

『俺にはそれはできない…。あいつの事を見つけたかったのに、あいつより先に死んでしまったから…』

そう言って俯く純一を見た途端、胸が締め付けられるような気分となった。

その後、幾何かの時を沈黙が続く。

「…相わかった。染谷純一の霊よ…」

『!』

最初に口を開いた某は、己の両手を見つめながら話を続ける。

「某とて…もう、あの娘が悲しむ顔は見えないからな…。それに、

何があっても守り、幸せにするとこの命に誓った……！」

狭の前世とやらについてであったり、素藤をどう見ているのかなど……揺れ動く想いがあったが……

いろんな想いが交差していたが、今日の前にいる霊との対話で、某の決心がついた。その表情を見た純一は、安堵したのか、少しだけ微笑みの色を見せる。

『……頼むぜ、八犬伝のヒーロー……！』

意味不明な台詞を告げた彼は、その場から姿を消した。

染谷純一の霊が何故現れたのか、いろいろと残る疑問はあったが……この時の某は、狭の事で頭がいっぱいであった。

待っていてほしい……狭……！！

強い想いを胸に抱きながら、某は夜を過ごす。そして、“始まりの地”とも言える霊山・富山へ向かう事となるのであった――――

「信乃……どうしたの？」

己の住まう場所となった東条城の本丸から安房国を眺めていた某は、後ろからやってきた狭に声をかけられる。

「いや……。これまでの事を少し……思い返していたのだ」

「そっか……」

すっかりこの時代の服装を着なれた狭が、某の隣に立つ。

「本当に……いろいろな事があったよね……」

「ああ……」

某の隣に立った彼女もまた、安房国の景色を眺めながら呟く。

富山では、思わぬ事実を聞かされて困惑したが……素藤との戦いがあった、今の暮らしがあるようなものだからな……

あれだけ敵対していたのに、今にして思うと……ただの悪人ではなかったのかもしれないと某は無意識の内に考えていた。

「狭……」

「ん…？」

彼女の名を呼び、これまでに起きた出来事が走馬灯のように蘇る。

「父・番作の死から今まで…まことにいろいろな事があったが…今、これだけははっきりと言える」

「信乃…？」

某が真剣な表情をしているのに気が付いた狭は、何を言われるのか待っているような表情をし始める。

己の心臓が強く脈打ってはいるが…心からそう思える言葉を口にしようとする。

「この先、如何なる事が起きようとも…某が、そなたと共に生きていきたい」

「信乃…！」

「…愛している」

狭が口を開くのを遮るようにして、彼女の華奢な肉体を抱きしめる。某は、彼女が教えてくれた“先の世”で使われている想いを告げる言葉を口にした。抱きしめる腕を少し緩めた時…頬を真っ赤に染めながら、照れているような表情を狭が見せる。そんな彼女を見た某は、心から愛しく想い—————彼女に接吻をした。それは、後で気恥ずかしくなるくらいに強く、厚いものであった。

その後の詳細は、文面で書くのも気恥ずかしいくらいな出来事であったため、あえて記さないでおこう。こうして、狭との出会いから今日までの事を書き綴った書物を、棚の奥底にしまいこむ。それは、彼女に「これ」の所在を知られないようにするためであった。

里見の犬士として戦の世を生き、生涯の伴侶ともいえる女子と出逢えた事—————それが、この書物に記した某の随想録であった—————

最終話 狭子の幸せを願って（後書き）

如何でしたか。

ここで出てきた染谷純一とは、「蒼き牡丹」の主人公・三木狭子の幼馴染で、作者によるオリジナルキャラ。彼についての詳細は、「蒼き牡丹」をご覧ください★

さて、とりあえず犬塚信乃編はここでおしまいです。

第2章も犬士の話といきたいですが：信乃ほど話が続く人物は少ないので、どうか試行錯誤中です。

「犬鬼人」というタイトルにある「鬼」と「人」の話は浮かんではいるのですが、登場人物順で書きたいので、もう少し後に：

とりあえず、考え付いた構成を今はまとめている最中だったりします！

外伝ですが、ご意見・ご感想があればよろしくお願い致します（^^）

プロローグ2（前書き）

第2章は犬飼現八の物語です。

プロローグ 2

何を好き好んで、このような風体をしておるのだろうか？

その娘に初めて会った時、某がまず考えたのがそれだ。全体が紺色に近い色合いで、裾や至る所に白い刺繍が盛り込まれた着物を身に着けてはいたが、その娘は女子。女子なのに何故、我ら武士が着るような着物を身にまもっていたのかが不思議であった。

その者の名は三木狭子。行徳の古那屋という宿で出逢った際、「先の世から来た」と申していたが、かなり胡散臭い気がしてならない。おかしい言葉づかいをし、女子らしからぬ行動をする娘――――女子嫌いの某にとって、始めは共に歩く事すら嫌に思っていた。

しかし、己が伏姫なる里見家の者に生み出された八犬士の一人と知らされた時、某の周囲は何もかもが大きく変化を見せる事になる。某の頬にあるものと同じ牡丹の痣頬を持ち、犬の姓を名乗る者達。とりわけ武蔵国・大塚村が出の犬士・犬塚信乃^{いぬづかしのもりたか}戌孝なる者とは、後に長きに渡る“好敵”と相成る事となる。

犬士を探す旅のさ中、某の中に眠っていた素質の目覚めと共に始まる、人外なる者との戦い。淡き恋心、葛藤、戦――――多くの事象を経て、女嫌いだっただ某も妻をめとる事と相成る。

これは、天涯孤独の某を変えた、犬士と“先の世から来た姫”と共に旅した頃の出来事を記録した犬飼現八^{いぬかいげんぱちのぶみち}信道たる某の物語であった

第1話 鬼の資質を持つ人間

「城下にて、賊を一撃で沈めた奴がおるそうだ」

「へえ……。俺は、女子のような童が倒したと耳にしたぞ！」

澁^{こが}我の御所より深き地の底にて、獄舎の見張り番がそのような事を口にしていた。

女子のような童が、大の大男を一撃で……。か。成程、浮世ではそのような事が：

当時、お上に異を唱えた罪で獄舎に繋がれていた某は、牢の中で見張り番の会話に耳を傾けていた。

強^{さが}き者の話を聞けば、一度^お会うてみたい……。と思うのは、武芸者の性^{さが}か：

同時にそんな事を考えていた。

その会話から幾何かの時を経て思わぬお召しを受けた某は、牢を出る事が叶う。また、会話に出てきた“女子のような童”の正体が、三木狭子という“先の世から来た姫”だったという事実を、この後に待ち受けている旅の道中で知ることと相成るのであった——

「……誰かを助けるのに、理由なんているの？」

獄舎を出た後、芳流^{ほうりゅう}閣の屋根の上で犬塚信乃という公方を狙った賊と死闘を繰り広げる。

しかし、最後の方で利根川に転落してしまい、流れ着いた国境の地・行徳にて出会った女子がこの台詞を口にする。それは、女が“欲深く卑しい存在”としか見ていなかった某にとっては、目を丸くするほど驚いた台詞であった。

行徳で宿を営む男・犬田小文吾に匿われた某と信乃。しかし、その後まもなく、彼奴は破傷風にて死線をさまよう。

「…某がやる」

この時、「その役目は某にしかできない」と考え、名乗り出る。破傷風に冒された信乃を救うには、若き男女の生き血が必要だという。しかし、女子の血の方には一つの決まりがあり、その場の流れもあったが、男子の着物を身にまとった女子・三木狭子が己の血を捧げると申し出たのだ。しかし、血を絞るにしても、刀の使い方を誤れば、失血死する。故に、その女子を死なせぬように血を搾り取る役目を某がやる事となったのだ。

「痛むと思うが…許せ」

娘の着物の袂をたもとまくり、某は右手に小太刀を握りしめる。そやつの右腕には、刀傷としては不自然な形をした傷が存在していた。嫁入り前の娘の身体を傷つけるのに多少のためらいがあった某は、あえてその傷があった場所に刀の斬りこみを入れる。

「痛っ…！」

鈍い音と共に、某の小太刀が娘の細い腕を傷つける。

加減してはいるが、それでも感じる痛みは強い。本来なら悲鳴をあげても可笑しくないというに——————その娘は歯を食いしばって、必死に痛みに耐えていた。

この時、何故か某の心の臓がドクンと鳴ったのをよく覚えている。

「法師様！お気をつけて…！」

去っていく法師に、先の世から来た娘が見送る。

狭や小文吾の協力もあり、病が治り起き上れるようになった信乃。

その後、狭と共にちゅだいぼうしおった、大法師というご出家が、我らに里見の八犬士だという事。そして、伏姫との縁について語りを聞いた。また、同時に狭が“先の世から来た女子”である事も知る事となる。

信乃の話によると、彼の故郷にいぬかわそうすけよしどう犬川莊助義任という犬士がおおらしく、そやつを迎えるために我らは旅へ出る事となる。一方、ご出家は主である里見義実公にさきみよしざね報せるべく、一足先に行徳を後にした。

…？何故か、おかしい気配を感じる…。これは…殺気…？

古那屋の廊下に立っていた某はこの時、宿の周辺に今までに感じた事のない気配を感じ取る。その気は黒く禍々しい……。まるで、妖のような気配だった。

不思議に思った某は、警戒をしながら周囲を見渡す。

「現八：どうしたの？」

「！！」

すると、不意に狭子の声が聞こえてくる。

その瞬間、感じていた禍々しい気が一瞬にして消え失せる。

「…お主か」

狭の存在に気がついた某は、我に変えたような表情で口を開く。

「何やら、誰かに見張られているような気がしたのだが……。どうやら、気のせいのようなじゃな」

困惑の色は消えなかったが、某は狭や信乃達にはそのように口にした。

一体、あれは…何だったのだろうか？

その後、信乃・小文吾・狭と某の4人は古那屋を出て、信乃の故郷である武蔵国・大塚村へ向かう事となる。道中、某はあの禍々しい気の事が頭から離れなかった。

しかし、それもある者達の襲撃によって、“禍々しい気”の正体を知る事と相成るのであった—————

「狭！！！」

その場に現れた際、某は驚く。

恐怖に飲まれそうな表情をした彼女の前に、この世の者とは思えないような“気”を発する白髪の男がいた。狭の右腕を掴んでいたその男の口元には、僅かだが血がついている。このありえないくらいの殺気に怖気づくも、絡まれている娘の元へ行こうとした時…その男が某の前に立ち塞がる。

「てめえの相手は、俺様がしてやるぜ！！」

目に負えるか否かぐらいの一閃を何とか弾いた某は、間合いをとった際にこの台詞を耳にする。

紺色の長髪を頭てっぺん近く辺りで結い、少し肌蹴ているが忍のよ
うな格好をした男が視線の先にいた。その後、某はこの男との死闘
を繰り広げる事となる。

「このかんじ：まさか、古那屋で感じた気配は、貴様か！！？」

「お？ もしや、俺様が潜んでいた事に気が付いていたのか？」

「ふん！ そのような禍々しい気を感じた途端、すぐに気が付いたわ
！！」

「！！」

某の台詞を聞いたこの男は、すぐさま間合いを取る。

「へえ：まさか、人間の分際で俺様の気配に気が付くとは：お前、
見どころがあるのかもな？」

「：何の事だ」

意味深な台詞を口にする男は、不気味な笑みを浮かべていた。

狭：！！？

この時、我らから少し離れた場所にいた狭と白髪の男の姿が目に入
る。よく見ると、右腕だけが吊り上げられた状態で、まるで気絶し
ているように見えた。

「少しおとなしくしてもらった：。さて：一緒に来てもらおうか：
！」

白髪の男がそう口にした途端、某はこのままだと狭が連れ去られる
事を本能で悟る。

「くっ：！！」

彼女の方へ向かおうとしたが、この忍の格好をした男が行く手を阻
み、救出に向かえない。絶対絶命だったその時：信乃や小文吾の登
場によって、事態は変わった。

「ちっ：お楽しみもここまで：か」

「何！！？」

信乃が白髪の男に立ち向かったのを見た群青色の髪の男は、ため息

をつきながら忍び刀を納める。

「!?!」

すると、一瞬にして男の姿が消える。

どこへ行ったのかと、某は周囲を見渡す。

「お前：同族になる資質があるな」

「!?!?!」

耳元に、気色悪い声を囁かれ、某は驚く。

気配すら感じなかったその男は、いつの間にか己の背後にいたのである。

「っ!?!?!」

悪寒がした某は、その直後、背後に向きなおして刀を振るう：が、男の姿はまるで霧のように薄くなり、消えてしまう。

「どこいきやがった：!?!?!?でてこい!?!」

周囲を見渡すが、奴の気配がほとんど感じられない。

『くく：。何、またてめえとは相まみえる事となりそうだぜ?』

「何!?!?!?」

すると、どこからか奴の声が響いてくる。

『あのうまそうな小娘の事もあるしな：。まあ、その時にでも、遊んでやるよ』

「!?!」

意味深な台詞に突然、嫌な予感を感じる。

しかし、某の驚きはその先にあった。

『あばよ!“鬼”の資質を持つ人間!?!』

「なっ：!?!?!?」

思わぬ台詞に、身体が硬直してしまう。

“鬼”：だと：!?!?!?」

その後、奴が口にした言葉について考えたが：いくら考えても、見解が見つからない。

：：そうだ、狭と犬士達：!?!?!?
あいつら

我に返った某は、地面に座り込んで茫然としている狭子の元へと走

り寄るのであった。

この襲撃の後、我らは犬川莊助を仲間にし、次なる犬士・犬山道いぬやまどう節忠与せつただともを迎えるために上州・白井へ向かう。道中で一騒動に巻き込まれた後、くの一の風貌をした娘・単節ひとよの導きを経て、上野国・荒芽山に住まう老女・音音おとねの草庵を訪れる事と相成った。そして、この老女の口から“鬼”という人外の者達の存在を知る事となる。

「素藤を始めとし、先ほど姫の血を食らおうとした忍・狩辞下りようじげや、漆黒の着物をまとう鬼・牙静がせい……。彼らの狙いが、姫である事も……。方々、ご存じですね？」

「!？」

音音が申したこの台詞に、某の眉間にしわが一つ増える。

狭の血を食らおうとした……。って、まさか……。!!

この時、某の心の蔵は強く脈打っていた。

『あのうまそうな小娘の事もあるし……。まあ、その時にでも、遊んでやるよ』

墓田樵頭素藤ひきたごんのかみもとふじという蒼血鬼（＝肉体が冷たく、血を食らう鬼のこと）らの襲撃を受けた際、某の前に立ち塞がった男りようしげ：狩辞下が申し上った台詞を思い出す。

それを思い出した某は、無意識の内に話を聞きいる狭の顔を見つめていた。

彼女の首筋と耳たぶには、僅かではあるが血痕が残っていた。

そういう……事か……!!!

某は、皆と共に話を聞くさ中……激しい憤りを感じ、膝につけていた右手の拳を強く握りしめていたのである。

話がまとまった後——————我ら一行は、この草庵で夜を明かす事となる。音音から信じられないような話を多く聞いた某は、気になって寝付く事ができなかった。その老女によって、狭自身が知らなかった事も知り得たが……今の某は、それよりも“鬼”という

存在が気になっていた。

「：隠れてないで、さっさと姿を現したらどうじゃ」
考え事をしていた某は、その後すぐさま気が付いた気配の方を睨みつける。

「：やっぱり、気が付いていやがったか」

ほんの短い間があった後、木陰に隠れていた狩辞下が姿を現す。
草庵の入口付近にいた某は、少し離れた場所にいる奴を睨みつけながら、重たくなった口を開く。

「：何用じゃ」

「当然、お前らの見張り：偵察さ。素藤の命でここまで来たが：もう一つ、別の用もあってな」

「：これ以上、狭には指一本触れさせないぞ：！！」

この台詞によって、某が殺気立っている事に気が付いた奴は、不気味な笑みを浮かべながら、飄々とした態度で口を開く。

「ああ、あの小娘の事か！：予想通り、うまい血の持ち主だったぜ？」

「何っ！！？」

狩辞下は、某を試すかのような口調で挑発してくる。

しかし、この台詞によって：おつぎがやつらだまさ扇谷定正の家臣と殺りあっていた際、狭子がこの男に襲われていた事を悟る。

「まあ、あの小娘は素藤のお気に入りらしいから、これ以上の手出しはしねえが：」

ニヤニヤしている奴の表情は、徐々に狂気に満ちた笑みへと変貌していく。

「あの娘から頂戴した血の味：そして、その時に見せた恐怖に包まれた表情：。あれは、本当に快感だったぜ：！！」

「！！！」

そう口にする奴を見た途端、全身に鳥肌が立つ。

某の目の前にいた男の瞳は――――――――――まさに、“血に飢えた鬼”そのものだったからである。

冷や汗をかき、茫然としている某の目の前に、思いもよらぬ人物が姿を現す。

「…現八殿。お氣を確かに」

「お主…！」

隙だらけの某の目の前に現れたのは…栗色の髪を持ち、単節ひとしよの双子の姉である鬼の忍・曳手ひくてであつた。

「姿をさらしてしまい、申し訳ない。…しかし、事態を見てこれは放置できぬと判断故の行動…どうか、お許しください」

冷静な口調で申すその忍びは、敵の目の前に立ちはだかるようにして立っていた。

「…どうやら、邪魔が入ったようだな」

少し離れた場所にいる狩辞下が、そう口にしながら舌打ちをする。

「ここは、我が主が住まい、今は客人も参られている場所…。早々に立ち去れ、外道が…！」

物凄い殺気をまとったくの一の声が、辺りに響く。

女子とはいえ、流石は鬼の忍び…。人の子よりは強き言霊があるのだろうな…

この時、某はそんな事を考えていた。

「…今回は刃を交えるつもりはねえから、安心しな！とりあえず、今宵はおとなしく退散してやるが…」

その場を去ろうとした蒼血鬼は、何かを思い出したのか、その場に立ち止まる。

「前に申した“鬼の資質”…ってのは、並の人間よりも力に優れている事。そして、鬼おれたちの氣配を感じ取れる能力を持つ事を指す」

「…！」

この時、某の表情は一変し、冷静な表情をした曳手ひくても眉を一瞬だけ動かす。

そんな我らの動揺を目の当たりにした狩辞下は、満足そうな笑みを浮かべながら、さらに話続ける。

「俺達側につくなら、歓迎するぜ？…犬飼現八信道！いぬかいげんぱちのぶみち」

不気味な笑みを浮かべた奴は、その台詞を残して、あっという間に姿を消してしまう。

敵が去った後……しばらくの間だけ、我らの間に沈黙が続く。

「……明日、貴方様みょうにちも含め、朝早い出発となるでしょう。……今は兎に角、お体を休めてください。見張りの方は、我ら双子が致します故……」

「あ……ああ……」

冷静な口調で促され、某はその場を後にする。

“鬼の資質”……。一体、奴はどういうつもりで某にあんなことを申したのだ……!?

奴と対峙した事で、狭が襲われていた事を認識する事が叶ったが……去り際に残した言葉の真意が掴めぬまま、某達は新たな旅立ちを果たす事となるのであった――――

第1話 鬼の資質を持つ人間（後書き）

いかがでしたか。

さて、今回の現八編は彼の視点から見た物語ですが……。今回は本編では語れなかった彼の持つ”資質”に焦点を当てようかなと思います。

現八は犬士の中でも信乃の次にお気に入りのの登場人物だったりするので、番外編を書きたいな〜と思いつつ、構成がなかなかまとまらないかんじでした。

今回も、どこで話の区切りをつけるかの判断がしばらく、こんなかんじに……（汗）

基本、本編である「蒼き牡丹」の時系列に沿って話が進みますが：一方で、最初の犬塚信乃編で出てきた場面も少しあるため、随想録1を読んでから読むと、よりわかるかと思われます。

さて、今回の番外編は狩辞下りようじげや曳手ひくてのように、本編ではあまり活躍のなかった登場人物が少しずつ出るのが見どころかと思います。

番外編ではありますが、ご意見・ご感想がありましたら、宜しくお願ひ致します（へへ）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9061x/>

犬鬼人随想録 ～蒼き牡丹外伝～

2011年11月20日07時14分発行